

## 編 集 後 記

本誌は、「全学的規模の特色ある雑誌をつくろう」という学長の提案をきっかけに、昨年末に刊行が開始されました。その経緯について、詳しくは創刊号の編集後記を御覧ください。創刊号を同窓生および関係諸機関などに広く送付しましたところ、さまざまな御意見・御批判を頂戴しました。厚く御礼申し上げます。

さっそく御批判を肝に銘じ、まず、表紙にくふうを加えて誌名をいっそう際立たせることにしました。また、執筆者名のローマ字表記は、名・姓の順ではなく姓・名の順と改めました。中身の体裁は創刊号のものをほぼ踏襲しましたが、内容面ではいっそうの充実を心掛けました。今回も忌憚のない御意見・御批判をお寄せください。

本誌は、冊子のかたちで公表しているだけでなく、そのままインターネットにも取り込み、全国津々浦々に向けて発信しています。本学のホームページ (<http://www.asahikawa-med.ac.jp/>) をぜひ御参照ください。

さて、本号の冒頭には、昨年12月まで解剖学第一講座の教授として研究・教育に多大な貢献をされ、本年1月に大阪市立大学医学研究科に赴任された木山博資教授の玉稿を、「巻頭特別論文」として掲載しました。進展いちじるしい神経細胞研究の最前線が、わかりやすく解説されています。この分野の第一人者であられる同教授には、新天地で今後ますます御活躍されますよう祈念いたします。

「依頼論文（総説）」では、創刊号収録の分と合わせると、分子・遺伝子・細胞・組織・器官など、人体のさまざまなレベルでの生物医学的研究、また社会医学的研究、看護学研究、さらには、医学・看護学と他の学問との複合領域における研究など、いろいろなタイプが出揃いました。広がり深まりゆく医学・看護学の最前線を実感していただけたのではないかと思います。

「エッセイ」は笹森秀雄名誉教授にお願いしました。先生は半世紀余りにわたって都市社会学の研究に従事され、傘寿を過ぎてなお矍鑠として御活躍中です。

「投稿論文（原著）」2編は、いずれも、学外の専門家による査読の結果を踏まえ、執筆者自身の手直しと編集委員の点検とを経て掲載に至ったものです。

「依頼稿（報告）」は、本学の、主として教育面での取り組みを積極的に学内外に紹介し、今後の参考としていただくとともに、御批判も仰ぐことにねらいがあります。目下、本学では学術国際交流が活発化しつつあります。また、3年目を迎えた医学科の新カリキュラムには、随所で微修正が加えられています。さらに、昨年オープンした看護学専攻の大学院も徐々に軌道に乗つつあります。これらの点について、当該分野の担当責任者にまとめていただきました。

創刊号で昭和48年度の開学時の入試問題を取り上げた「旭川医科大学回顧資料」のコーナーですが、今回は、その翌年の昭和49年度の資料を取り上げ、本学の広報誌について紹介しました。「温故知新」の一助ともなれば幸いです。

末尾ながら、原稿の執筆や査読を快諾された学内外の諸先生と、印刷・製本などで御苦勞をお掛けした旭川印刷工業の各位に厚く御礼申し上げます。なお、編集責任をいっそう明確にするために、本号から編集委員全員の氏名を奥付のページで公表することにしました。 (K. H.)

### 表紙解説

講座名中、色が変わっている部分があります。何を連想されるでしょうか？

創刊号においてビッグバンをモチーフにイメージ化してみました。専門書には、「ビッグバンの初期段階において、核分裂と核融合により全ての元素が生まれ、光が放出された。」とあります。今回は、下部の銀河と上部の原子模型の中心を、高エネルギーを持つ一条の光が貫いている状態を描いてみました。この両者の間には、幾何学的な相似性を感じます。このように、図形の一部を拡大すると元の図形と一致することを自己相似といい、そのような性質を持った幾何学をフラクタル幾何学と呼ぶようです。例として、海岸線、樹木、雪の結晶などがあげられます。ある意味で、宇宙はそのスケールを問わずフラクタルな構造の連続であるとも考えられます。

そのようなことに思いを巡らせながら、講座名を見つめていると、さまざまな【元素記号】が浮かび上がってきたのです（一行に一元素）。

整形外科学講座 今井 充